



社会を見つめる、「私」を伝える

～なぎさの自己表現力コンテスト～

広島なぎさ中学校・高等学校
教諭 武内 渉

1.はじめに

広島なぎさ中学校・高等学校では、2月に「自己表現力コンテスト」(1～4年生)を実施している。表現力の育成を目指したこのような取組みは男子校時代から始まり、記録を辿ると昭和54年の「中学校弁論大会」まで遡ることができる。その後「レシテーションコンテスト」を加え、平成14年に「自己表現力コンテスト」となって今に至っている。

現在、学習指導要領の改訂や大学入試改革が推し進められており、その中で思考力・判断力・表現力の育成は従来にも増してその重要性が高まってきている。本校ではそうした教育改革の動きを先取りする形で、独自の取組みを進めてきた。英語科・国語科を中心とするそれらの取組みについて紹介しつつ、学びの成果や今後の課題について述べてみたい。



コンテストでは司会も生徒が務める

2.コンテストの目的

コンテストの目的は以下の通りである。

- (1) 発表者のプレゼンテーション力の育成: 大勢の人の前で発表することにより、的確に表現する力を身に付け、伝える喜びを知る。
- (2) 聞く態度の育成: 仲間の発表を聞

いて、自分の考えを深めるとともに表現力を高める。

- (3) 学ぶ集団の育成: 表現力の高い発表をお互いに認め合うことのできる集団を作る。

指導においては、これらの目的を踏まえ、発表の質の高さを追求することで、生徒の学びが深まることを目指している。

3.日本語によるコンテスト

平成29年度のテーマ

学年	テーマ	ねらい
1年	読書と私	本との出会いによる自己変革
2年		
3年	職業観	働くことについての哲学的思想
4年	身近な社会問題	社会に貢献できる自己の模索

テーマとねらいからも窺えるように、「日本語自己表現力コンテスト」は、主体的な進路選択を行う力の育成と密接な関係がある。新しい大学入試では、自己の将来設計や社会への貢献意欲について問う志望理由書(エッセイ)が重視されると言われている。そのためには認知・非認知能力の成長を生徒自身が自覚的に記録・蓄積していく必要がある。本校の「自己表現力コンテスト」は、そのような生徒の主体的な進路探究を促すものとして系統的にプログラムされている。

1、2年生では「総合的な学習の時間」との横断的な取組みの中で読書の時間を設け、生徒は読書を契機とした先哲との対話を通じて自己の在り方を考え、「私」を伝えるための表現を磨

く。3年生では、職業体験を通して職業観を養う「仕事ウォッチング」を体験した後に、仕事の意義や自己と社会との関わりについて各自の想いを深め発表する。4年生では身近な社会問題に目を向け、どのような課題にどのように取り組むか、自らの考えを論理的かつ効果的に発表する。

いずれの学年においても、コンテストは、生徒が自分自身を見つめ直し、社会に貢献できる自己を見出すことに大いに役立っている。

4.英語によるコンテスト

平成29年度のテーマ

学年	部門	テーマ
1年	レシテーション	英語の物語に親しむ
2年		
3年	スピーチ	日本の社会問題
	わくわく部門	自由な発想で
4年	スピーチ	グローバルな視点で

グローバル化が進む現在、大学入試改革においても英語の4技能の総合的な評価が謳われている。本校では4つの教育目標の1つに「国際性の涵養」を掲げ、いち早く4技能の育成、とりわけ「書く」力・「話す」力の伸張力を入れてきた。1、2年生のレシテーションでは、課題文を暗唱・発表する。単に暗記力だけではなく、表現の仕方や発音、間の取り方など、伝える力の巧拙が問われるので、生徒はそれぞれ工夫を凝らしてオリジナリティあふれる発表を行う。



表情豊かな1年生のプレゼンテーション

一方、3年生のスピーチは、各自が関心を持った社会問題をテーマに選び、自ら論理的に考察したことについて他者の共感を呼ぶ表現方法を工夫して発表する。さらに、3年生では英語で、ミュージカルや歌、落語など様々な発表にチャレンジし、スピーチの枠を越えた自由な表現に挑戦する「わくわく部門」も行っている。



「わくわく部門」での落語の演技

4年生は、中学までの学びをさらに深化させ、グローバルな視点で捉えた問題を、デジタル媒体を用いながら発表する見事なプレゼンテーションである。

また、各コンテストでは外部のスピーチコンテストに参加した生徒がモデルスピーチを披露する。優れた発表に触れることが、他の生徒にとって高い意識づけとなっている。



表彰式を終えた代表生徒達(1,2年生)



パワーポイントを巧みに活用して発表

ロフィアを渡された時、私の心は嬉しさと達成感で満たされました。同時に、当日までスピーチのご指導をしてくださった先生の顔が思い浮かび、感謝の気持ちでいっぱいになりました」(中1女子)

「私は、どのように言葉で表現したらいいかわからず練習では苦戦しました。しかし、先生の的確な指導のおかげで本番は緊張することなく、自分の中で最高のスピーチをすることができました。そして、最優秀賞を受賞することができてとても光栄です。毎日指導してくださった先生、応援してくれたクラスメイトに感謝しています」(中2女子)

発表に至るまでの自己と向き合う姿、先生方への感謝の気持ちなど、生徒の心の成長が読み取れる。

6.今後に向けて

本校では、「自己表現力コンテスト」だけでなく、自分の考えを伝え、表現する場を多く設けている。仕事ウォッチングの報告会や研修旅行の報告会など、主体的に考え行動したことを、他者に伝えることを意識させている。それが、主体的な進路選択、将来の人生設計に大きな影響を与えると信じるからである。これからも、社会で求められる力を先読みしながら、生徒の表現力の育成に向けて独創的な教育活動を進めていきたいと考えている。

5.学びの成果

発表に至るまでのプロセスで生徒は多くのことを学ぶ。授業において国語科・英語科の先生方の指導はもちろん、英語の場合はネイティブの先生方からも指導を受ける。それらのきめ細やかな指導が、TPOに合わせた話し方やアクセント、伝える技術の向上にもつながっている。各学年で、まず全員がクラスでの発表を行い、その中から代表を選出するので、生徒は皆、休憩時間や放課後、家庭で練習を積み重ね本番に臨んでいる。代表となった生徒は本番までにさらに徹底的な練習を繰り返す。

コンテストを通して生徒は様々な変容を遂げる。外部コンテストへの参加や種々の行事の司会などに積極的に挑戦する姿勢を示すようになる。

次に挙げるのは生徒の感想である。

「ステージ上で私の名前が呼ばれ、ト